

郷土の二輪文化の伝承のために

— 名古屋郷土二輪館 —

■郷土が生んだ自転車、オートバイの殿堂

キャブトン、トヨモーター、ノーリツ…。名古屋郷土二輪館は、大正、昭和に名古屋市を中心に愛知県内一帯で生産されたオートバイ、自転車を集めた私設の博物館である。知多郡阿久比町草木の二輪車愛好家の富成一也（71歳）が2015（平成27）年に自宅に隣接して開設、希望者に一般公開している。二輪館は、広さ60㎡。1階にオートバイ18台、2階に自転車23台の計41台を展示している。

館主は元々オートバイが好きで10代から乗り始めた。27歳の頃、雑誌で1953（昭和28）年に名古屋市をスタート地点として、東海3県の公道でオートバイレース「名古屋TT」が開催されたことを知り、県内のメーカーもレースに参加したことに興味を持ち、調べ始めたことが収集のきっかけとなった。

戦後から昭和30年代にかけて、県内ではオートバイメーカーが創業や廃業を繰り返し、その数は70社以上に及んだ。大型バイクの「キャブトン」、自転車に補助エンジンをつけただけの「トヨモーター」、腰掛スタイルで乗るスクーターの「シルバーピジョン」など、当時を知る人によっては懐かしい車種のオートバイが並び、約500点の関連資料も展示されている。



1階のオートバイの展示 2023年11月撮影



2階の自転車の展示 2023年11月撮影

2階には明治初期の木製の「だるま自転車」はじめ、自転車産業の先駆となった岡本自転車が生産したノーリツ自転車を中心に、大正から昭和の自転車が並び、戦後、間もない1950年には名古屋市内だけで、自転車関連企業が145社あった。中京地区は元々、風土に根差した木材の加工や織物業が盛んで、軽機械工業が発展した。戦後の復興とともに、オートバイ・自転車メーカーが続々と生まれ、二輪熱が盛り上がった。しかし、昭和30年代に大手メーカーが台頭してくると、資本力と生産力で劣る零細メーカーは苦境に立たされた。1959年の伊勢湾台風で被害に遭い、ほとんどのメーカーが衰退していった。

■郷土の二輪文化と歴史を未来に語り継ぐ

流星のように消えていったメーカーの足跡を一つ一つ訪ねまわり、人々の証言を紡ぎ、貴重な資料をオートバイ、自転車とともにコツコツと集めてきた。集められた一つ一つには思い出があり、物語がある。

「名古屋郷土二輪館」は、二輪に関わった人々の盛衰を、技術者の情熱や夢を、郷土の二輪文化として捉え、語り部とし伝承していきたい。

（富成一也）

所在地：〒470-2211 愛知県知多郡阿久比町
大字草木字栄38番地
見学：見学は予約制（無料）
連絡先：富成一也 電話090-4198-4771
アクセス：知多半島道路「阿久比IC」より
車で3分、名鉄電車「阿久比駅」
からタクシーで5分